



### 大きな夢と逃げ道を

日本人研究者がノーベル賞を受賞すると、マスコミはこぞってお祭り騒ぎのようにはしゃいで受賞者を国民的英雄に祭り上げる。時の総理大臣から電話がかかってくる祝辞を受ける光景がテレビで中継される。この時ばかりは国民に夢を与える素晴らしい職業として研究者はもてはやされ、子供達の将来なりたい職業ランキングも上位に跳ね上がるそうだ。しかし、研究者の現実はそう甘くない。多くの大学や研究所で任期制が採用されており、失職の恐怖に怯えている研究者も少なくない。給与にしても恵まれているとは言いがたい。小生が医学部の准教授だった頃、指導していた外科医の大学院生を飲みにも誘ったのはよいが、彼らの週末のバイト代が自分より高給だったことがわかり奢ってやるのが馬鹿らしくなったことがある。私は、研究者の給与や任期制に不満があるわけではない。むしろ研究者全員に任期制を導入して再任の条件も厳しくすべきだと考えている。そのかわりに、もっと独立するチャンスを増やすと共に、研究を辞めてからのキャリアパスについても路頭に迷わないよう方策を練ってもらいたい。

昨年のある教授会で、40歳になる助教の退職が報告された。直接本人に聞いてみるとこれから医学部の学士編入を受験するという。彼は、東大を卒業してから今日まで研究者の道を歩んできたが、ここまで芳しい業績を上げられず、もはや研究者として生き残れないと失望して決心したそうだ。今年彼は、昔取った杵柄で地方医学部の学士入学試験に合格できたが、学士入学は狭き門であり誰もが簡単に合格できるわけではない。教授や独立した研究者 (PI) になれるのは一握りだ。それ以外の研究者のキャリアパス

を社会全体でサポートする体制が必要だ。たとえば留学経験のある研究者に限定した公務員枠や企業の中途採用枠を設けてはどうか。あるいは中学や高校の教員の道を開いてはどうだろう。私の研究室では学部を卒業してすぐに中学や高校の理科教師になっているが、卒業研究程度では研究の面白さを生徒に伝えることは難しい。研究を熟知した教師に研究の魅力を生徒に語ってもらえれば、日本の未来を担う人材の育成に貢献できるはずだ。もっと良い方策もあるだろう。ここは国のリーダーシップに期待したい。

日本ではPIになるまでに長い丁稚奉公を経なければならぬのも問題だ。以前私の研究室に極めて優秀な学生がいて、彼は留学先でも *Nature* や *Cell* に論文を発表した。そのボスからも彼はアメージングだと最高の評価をもらっている。まだ32歳であったが、独立心旺盛な彼は斬新な研究テーマを心に秘めて、日本でPIポジションを探した。予想通り、若輩でまだ論文数の少ない彼にオファーされたのは助教のポジションだけだった。ところが、留学先のボスの推薦もあり、彼には欧米諸国から複数のPIポジションのオファーが舞い込んだ。そのポジションは学位取得後7年以内の若手限定のPIポジションであり、5年任期だが破格の研究費がついていた。ここに日本と海外の科学に対する考え方の違いが明確に表れている。海外には多くの優秀な若手に独立のチャンスをバラまいて、一人でも独創的な研究が花開けば成功という考え方がある。一方、日本では一人でも失敗するのを恐れ、信用できるまで独立するチャンスを与えようとはしない。理研の小保方氏の一件では、若手に対する警戒心をさらに強めたのではないかと心配だ。任期制だけ都合よく定着させて、使い捨ての駒のようにポストクを扱ってはいは、研究者を目指す学生は減るだろうし、優秀な若手研究者はますます海外に流出してしまう。そろそろ日本も発想を転換する時期ではないか。研究者の独立チャンスの拡大とキャリアパスの充実の両輪がうまくかみ合えば、日本の科学のさらなる発展が期待できるだろう。

(牡丹皮)